

設置の趣旨等を記載した書類

目次

1. 設置の趣旨及び必要性	p. 2
2. 学部・学科等の特色	p. 4
3. 学部・学科等の名称及び学位の名称	p. 5
4. 教育課程の編成の考え方及び特色	p. 6
5. 教育方法、履修指導方法及び卒業要件	p. 8
6. 多様なメディアを高度に利用して、授業を教室以外の場所で 履修させる場合の具体的計画	p. 9
7. 編入学定員を設定する場合の具体的計画	p. 9
8. 企業実習（インターンシップを含む）や海外語学研修等の 学外実習を必要とする場合の具体的計画	p. 9
9. 取得可能な資格	p. 10
10. 入学者選抜の概要	p. 10
11. 教員組織の編成の考え方及び特色	p. 12
12. 施設、設備等の整備計画	p. 12
13. 管理運営	p. 12
14. 自己点検・評価	p. 13
15. 情報の公表	p. 14
16. 教育内容等の改善を図るための組織的な取組	p. 14
17. 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制	p. 15

1. 設置の趣旨及び必要性

【意義・必要性】

旭川は、肥沃な土地と豊富な森林を持ち、将来の北の京としての発展が期待され、明治 24 年に旭川村となり屯田兵が入植し、本格的開発が始まった。明治 33 年の旧帝国陸軍第七師団の移駐でその産業・経済基盤が確立し、国策パルプ工業(株)も稼働したが、主要産業は、農業、林業、サービス業であった。昭和 36 年 7 月、人口が 20 万人を越え、急速に増加する中、家具を除けばこれと言った産業の無い旭川の工業化を図ろうと、当時の旭川市助役と市議会副議長等が道庁及び北海道大学を訪れ、高専誘致への協力を要請した。その後、当時の文部大臣、国会議員、文部省幹部に面会、高専の誘致活動を続け、厳しい誘致合戦の末、候補地を勝ち取り、昭和 37 年 4 月 1 日、本校が設立された。現在の旭川市は人口約 34 万人、サービス業が 83%を占め、主たる製造業は食料品、金属製品、家具・装備品製造となっている。

本校は、道北地区唯一の工学系高等教育機関として、地元からの極めて大きな期待の下に創設された。今日までに本科・専攻科合わせて約 7,600 名の卒業生・修了生を世に送り出し、我が国産業の発展に大きな貢献をしてきた。また、地域共同テクノセンターが中心となって、地域ニーズ、関連する技術動向の迅速・的確な把握と共に、産業技術振興会、地元自治体、同窓会及び他高等教育機関との連携を密にして、技術相談、共同研究、人材育成等に係る産学官金連携事業活動を行い、地域産業振興に寄与してきた。

北海道は全国で最も過疎化、少子・高齢化が厳しい地域である上に、産業における製造業比率は全国平均値 18.4%の約半分 9.4%に過ぎず、高専の立地としては極めて厳しい条件にある。北海道や旭川市では、道外からの企業誘致を積極的に推進しているが、これのみに頼る訳にはいかない。北海道の代表産業は、製造業の約 35%を占める食料品加工業とこれを支える農業や漁業であり、旭川に位置する本校としては、「食」と「農業」を抜きにした取組は考えられない。少子・高齢化については、直ちに対策を講じても結果が出るには 20 年近い時間が必要であるが、地元の雇用を増やし、必要な都市機能を充実・維持していけば、過疎化の進展にブレーキを掛けることが可能となる。その実現のためには、若者にとって魅力的な新たな雇用を地元で創出しなければならない。本校の取り組むべき課題としては、産業構造や就業構造の変革のキーとなる AI・データサイエンス、IoT、ロボティクス、情報セキュリティ分野の人材育成強化と共に北海道の強みの分野と工学技術の融合による新たな可能性を生み出していくことである。

最近、令和 5 年 2 月に国からの多大な支援のもと次世代半導体工場が北海道（千歳市）に設立されることになった。これは、北海道の産業界にとってゲームチェンジャーになりうる状況である。また、AI が技術のキーとなる新たな時代に必要の人材は、デジタル人材である。

半導体のハード面と AI・数理データサイエンスのソフト面の双方について実践を伴う人材の育成が不可欠である。加えて、各専門分野との融合、連携、高度化そして新たな価値創造のため、**北海道の食・農、およびグリーントランスフォーメーションを学ぶことにより、北海道を牽引する人材の育成**につながる。

現学科構成では、情報に関する学修を各学科で取り入れているものの、これから迎える Society5.0 では、より「デジタル」を主として専門に学修する人材の要請があり、現カリキュラムでそれを満たす学科が存在しない。

旭川高専は、Compass5.0「AI・数理データサイエンス分野」において全国の拠点校である。また、「半導体分野」において北海道のブロック拠点校である。また、KOSEN（高専）4.0”イニシアチブ”で培った北海道ベースドラッシングからスタートアップ環境整備事業の支援を得て北海道共創ラーニングへ発展して展開している。さらに Society5.0 を目指して急速な科学技術の進展により、求められている人材像が変化している。生成系 AI の台頭など、AI 技術の急速な発展により未来の予測がますます困難な時代になりつつあるが、そういった変化に対応できる人材が必要である。

このような状況のもと、旭川高専では Society5.0 にて活躍できる高専生を育成するため、高度情報教育を強力に推し進められるよう改組を行う。AI を中心にソフトウェア面の情報系に学びの主眼をおいた新学科「AI・デジタル情報工学科」を新設する。それに合わせて既存学科においても次世代の学びを実現するために再編改組する。北海道の半導体人材育成および 6G など次世代通信技術を備えた人材育成を強化するために、新学科「半導体・電気情報通信工学科」に改組する。また、機械系、電気電子系、情報系の複合的な領域で設計デザインできる人材育成を強化するために「ロボット・システムデザイン工学科」に改組する。さらに、北海道では再生可能エネルギーの割合が全国平均より高く GX の拠点と期待されており、機械系を基礎に GX で活躍できる人材育成を強化するために「エネルギー・機械デザイン工学科」に改組する。加えて、日本最大の食料供給地として農林水産業が盛んである北海道の産業構造に鑑み、これらの基礎となる生物に関する高度な知識と技術を持った人材の育成を強化するために、これまでコース制であった化学、生物を一本化し、「化学・生命工学科」に再編する。

【養成する人材像】

・ 未来の予測が困難な時代に、確かな専門知識と教養および実験に裏付けられた経験を持ち、それらと情報技術を有効に活用して社会課題を解決することができる。

【新学科等のディプロマ・ポリシー】

	AI・デジタル 情報工学科	半導体・電気 情報通信工学 科	ロボット・シ ステムデザイ ン工学科	エネルギー・ 機械デザイン 工学科	化学・生命工 学科
1	深い専門的な内容を理解するための基礎となる知識と、AI・数理データサイエンス、半導体をはじめとする社会に資する素養や最先端の科学技術を理解する力を身につけ、論理的思考をもって課題に取り組むことができる。				

2	情報工学の専門知識と技術および自然科学や工学の基礎知識を身につけ、新たなデジタル社会を切り拓くために、新技術分野に柔軟に対応することができる。	電気・半導体工学、情報通信工学の専門知識と、電気・半導体デバイス技術と情報通信技術とが融合する広い専門的視野を身につけ、新技術分野に柔軟に対応することができる。	機械工学、電気・電子工学、情報工学における知識と、システムデザインの考え方を身につけ、複合・融合領域にまたがる社会や地域特有の課題に対応することができる。	機械工学の知識を核に、航空宇宙分野や新たなエネルギー・輸送・環境技術をデザインし、専門的視野を身に着け、持続可能な社会に貢献することができる。	化学および生物学の専門知識と自然科学や工学、情報技術の基礎知識を身につけ、それらを基に化学・生命工学が関わる幅広い分野に対応することができる。
3	実験や演習を通して、身につけた情報分野の実践力をもとに、技術が社会に与える影響や様々な社会的課題に対応し、主体的に思考し行動することができる。	実験や演習を通して、電気・半導体・情報通信分野の実践力を身につけ、技術が社会に与える影響や環境について主体的に思考し行動することができる。	実験や演習を通して、機械、電気・電子、情報分野をバランスよく学び、身につけた幅広い実践力をもとに、様々なシステムをデザインし、主体的に思考し行動することができる。	実験や演習を通して、「かたちあるものをつくる」をベースに変化する社会的課題に対応し、主体的に思考し行動することができる。	実験や演習を通して、化学・生物分野の実践力を身につけ、社会や環境に及ぼす影響や責任を理解した上で、主体的に思考し行動できる。
4	自らの専門分野を中心として異分野へも学びを広げて多面的思考力と創造性を身につけ、他者と協働しながら社会における課題の発見・解決に向け行動することができる。				
5	日本語や外国語などによるコミュニケーション能力と異文化や異なる価値観を理解する力を身につけ、国際的視野を持って物事を考えることができる。				
6	豊かな人間性と健全な心身を備え、自らのありたい姿を実現するために必要な素養と倫理観を身につけ、継続して自己研鑽することができる。				

2. 学部・学科等の特色

養成する人材像として、「確かな専門知識と教養および実験に裏付けられた経験を持ち、そ

れらと情報技術を有効に活用して社会課題を解決することができる」ことを満たすために、

- ・全学科で
 - ・ 文科省 AI・数理データサイエンス認定制度のリテラシー、応用基礎を認定するカリキュラム
 - ・ 北海道の特色である半導体を含む MCC plus の内容を必修科目で配置
 - ・ 北海道の特色である サスティナビリティ、グリーントランスフォーメーション (GX)、スマート農業、医療福祉、ビジネス分野の社会実装系選択科目を配置
 - ・ KOSEN” 4.0” イニシアチブ「北海道ベースドラニング」を発展させた 実践を伴った課題発見解決型「北海道共創ラーニング」科目の配置
 - ・ 学科の垣根を取り払った学科間共通科目の配置
- ・新学科での特徴的なポリシーとして、
 - ・「AI・デジタル情報工学科」では、機械・電気電子・化学生物の基礎を学び、情報工学の専門知識と技術および自然科学や工学の基礎知識を身につけ、新たなデジタル社会を切り拓くために、新技術分野に柔軟に対応することができる。
 - ・「半導体・電気情報通信工学科」では、電気・半導体工学、情報通信工学の専門知識と、電気・半導体デバイス技術と情報通信技術とが融合する広い専門的視野を身につけ、新技術分野に柔軟に対応することができる。
 - ・「ロボット・システムデザイン工学科」では、機械工学、電気・電子工学、情報工学における知識と、システムデザインの考え方を身につけ、複合・融合領域にまたがる社会や地域特有の課題に対応することができる。
 - ・「エネルギー・機械デザイン工学科」では、機械工学の知識を核に、航空宇宙分野の開拓や新たなエネルギー (GX)・輸送・環境技術をデザインし専門的視野を身に着け、持続可能な社会に貢献することができる。
 - ・「化学・生命工学科」では、化学および生物学の専門知識と自然科学や工学、情報技術の基礎知識を身につけ、それらを基に化学・生命工学に関わる幅広い分野に対応することができる。

3. 学部・学科等の名称及び学位の名称

- ・新学科「AI・デジタル情報工学科」 Department of Artificial Intelligence and Computer Sciences
- ・「半導体・電気情報通信工学科」、Department of Semiconductor Electronics and Electrical Communication Engineering
- ・「ロボット・システムデザイン工学科」、Department of Robotics and System Design Engineering
- ・「エネルギー・機械デザイン工学科」、Department of Energy and Mechanical Design Engineering

4. 教育課程の編成の考え方及び特色

【新学科等のカリキュラム・ポリシー】

旭川高専は、ディプロマ・ポリシー（6項目）に定める人材を育成するため、低学年では一般科目を重点的に配置し、学年進行とともに専門科目に重点を置くくさび型5年一貫教育課程を編成する。各項目においては、高専機構モデルコアカリキュラムに示されている「基礎的能力」、「分野別専門能力」および「分野横断的能力」に準拠し、学科ごとに講義、演習、実験実習、PBL 科目を適切に組み合わせた科目を編成する。

学習成果の評価方法に関する方針

各科目の到達目標、ルーブリック、教育方法、授業計画、評価方法を web シラバスにより公開し、到達度を客観的に評価する。

1. 講義・演習科目においては、科目ごとに到達目標を設定し、演習・レポートなどの平常の取り組みと、定期試験などの結果を総合的に勘案し、到達目標に対する到達度を評価する。
2. 実験・実習および PBL などの科目においては、科目ごとに到達目標を設定し、課題への取り組み状況、レポート、発表などを総合的に勘案し、到達目標に対する到達度を評価する。
3. 卒業研究においては、到達目標を設定し、研究成果をまとめた論文、研究発表、取り組み姿勢などを総合的に勘案し、到達目標に対する到達度を評価する。

成績の評価及び単位認定基準

学業成績は、学習の成績と平素の成績を総合し、シラバスに記載された評価方法に沿って100点法をもって評価する。

科目の修得は、科目を履修し、かつ、学業成績の評価が60点以上に認定されることをいう。

学生成績の評価は、次表の区分により5段階に評定する。

評定	秀	優	良	可	不可
評点	100～90	89～80	79～70	69～60	59～ 0

	AI・デジタル 情報工学科	半導体・電気 情報通信工学 科	ロボット・シ ステムデザイ ン工学科	エネルギー・ 機械デザイン 工学科	化学・生命工 学科
1	社会に貢献でき、日々進歩する科学技術の理解を深めることができる基礎能力を育成するために、数学、物理、化学などの理系基礎科目や AI・数理データサイエンス関連科目、半導体関連科目と一般教養科目を系統的に編成する。				
2	情報工学における高度な基礎知識を育成するために、論理回路、情報理論、人工知能、プログラミング等の情報工学分野の科目とともに、機械・電気電子・化学生物分野の基礎科目を系統的に編成する。	幅広い分野における基礎知識を育成するために、電気回路、電磁気学、電子回路や半導体工学、環境エネルギー工学等の電気電子分野の科目とともに、プログラミング基礎、コンピュータ工学などの情報工学分野、ネットワーク工学などの情報通信工学分野の授業科目を系統的に編成する。	幅広い分野における基礎知識を育成するために、機械系科目（材料力学、CAD等）、電気電子系科目（電気電子工学、制御工学等）、情報系科目（情報処理、AI概論等）の3分野の基礎知識をバランス良く配置し、さらに多様で変化の激しい社会に対応できる力を備えるため、3つの分野を融合した科目（メカトロニクス、ロボティクスなど）を系統的に編成する。	エネルギーと機械に関わる基礎知識を育成するために基礎数学、力学及び情報技術の基礎を身に着ける。その上で、地球環境に配慮したエネルギー・機械システムをデザインし構築する力を備えるため、エネルギー系科目、材料・加工系科目、設計系科目、計測・制御系科目、電気系科目などを幅広く系統的に編成する。	複雑化する社会ニーズに対応できる幅広い基礎知識と高い専門知識の両方を育成するために、化学及び生物分野の基礎科目をバランス良く配置した上で、材料化学や生命工学分野などの高度な専門科目を系統的に編成する。

3	工学的な専門知識を応用しながら必要な工学的スキルを育成するために、情報技術が関連する総合的分野の実験、実習などのグループ活動を通じて他者と協働しながら実践力を身につけることができる実験・実習科目を各学年に系統的に編成する。	工学的な専門知識を応用しながら必要な工学的スキルを育成するために、電気電子、半導体、情報分野の実験、実習などのグループ活動を通じて他者と協働しながら実践力を身につけることができる実験・実習科目を各学年に系統的に編成する。	工学的な専門知識を応用しながら必要な工学的スキルを育成するために、機械、電気・電子、情報分野の内容についてグループ活動を通じて他者と協働しながら実践力を身につけることができる実験・実習科目を各学年に系統的に編成する。	工学的な専門知識を応用しながら必要な工学的スキルを育成するために、機械システムに関する総合的分野の実験、実習などのグループ活動を通じて他者と協働しながら実践力を身につけることができる実験・実習科目を各学年に系統的に編成する。	工学的な専門知識を応用しながら化学、生物分野における確かな実験スキル、ならびに高度な科学技術を活用する上で必要不可欠となる倫理観と化学薬品、設備等に関する安全意識を育成するために、グループで他者と協働しながら実践力を身につけることができる実験科目を各学年に系統的に編成する。
4	多角的な視野と創造力を育成するために、課題解決型実験・演習科目、分野横断型実験・演習科目及び卒業研究などを系統的に編成する。				
5	円滑なコミュニケーション能力を育成するために、国語、英語コミュニケーションなどの科目を配置し、異なる文化・価値観を理解する力を育成するために、社会系科目（地理、公民など）、グローバル科目などを系統的に編成する。				
6	健全な心身を育成するために、健康体育などの科目を配置し、さらに、将来に向かって自己研鑽し、主体的な行動力を育成するために、キャリアデザイン、インターンシップなどの科目を編成する。				

5. 教育方法、履修指導方法及び卒業要件

5 学科に再編することにより、1 学科の定員が 32 名となり、少人数教育を行いやすく、学生に寄り添った指導をしやすくなる。また、低学年では、混成学級により学科の枠を超えた交流を盛んにし学生の視野を広げる工夫を行う。さらに、学科間共通科目の導入により、当該学科の教員以外の教員が教える授業を展開し、従前の「学科」意識の垣根

を教員、学生ともに取り払う工夫を行う。全学科で半導体と AI・数理データサイエンス分野を共通で学ぶ他、高学年の選択科目で学生の幅を広げるべく、社会実装系科目を導入する。以下に箇条書きとして列挙する。

- ・ MCC 対応科目を配置
- ・ MCC plus 科目を配置
- ・ 全学科で AI・数理データサイエンス応用基礎分野認定
- ・ 全学科で半導体関連科目を配置
- ・ 特色としてサステナビリティ、グリーントランスフォーメーション、スマート農業、医療福祉、ビジネス分野の社会実装系選択科目を配置
- ・ PBL 系「北海道共創ラーニング」科目の配置
- ・ 学科の垣根を取り払った学科間共通科目の配置
- ・ 低学年に混成学級または学年担任制導入
- ・ 履修指導とキャリア教育、ポートフォリオ教育の融合

【進級・卒業要件】

- | | |
|-------|--|
| 1 学年： | 未修得科目が 3 科目以内 |
| 2 学年： | 2 学年において 未修得科目が 3 科目以内 |
| 3 学年： | 3 学年において 未修得科目が 3 科目以内 |
| 4 学年： | 4 学年において 未修得科目が 3 科目以内 |
| 5 学年： | 合計 167 単位以上（一般科目 83 単位以上，専門科目 84 単位以上）修得 |

6. 多様なメディアを高度に利用して、授業を教室以外の場所で履修させる場合の具体的計画

- ・ 高専間単位互換制度や大学・企業との連携講座、MOOC 等を用い、他校で開講する科目の履修を、同時双方向やオンデマンド型によるオンライン授業により 60 単位上限に開設する計画である。同時双方向型の授業は、教室、研究室又はこれらに準ずる場所で、授業中、教員と学生が、互いに映像・音声等によるやりとりを行う。また、学生の教員に対する質問の機会を確保する。オンデマンド型の授業は、教員等が教室等以外の場所において学生等に対面することにより、又は教員等が授業の終了後すみやかに適切な方法を利用することにより、質疑応答等による十分な指導を行う。

7. 編入学定員を設定する場合の具体的計画

- ・ 定員を設定する予定はない

8. 企業実習（インターンシップを含む）や海外語学研修等の学外実習を必要とする場合の具体的計画

【企業実習】

- ・ 全学科で企業実習を選択科目として設置する。令和 2 年度（M18, E10, S25、C5）、令和元年度（M30, E30、S34、C36）である。令和 2 年度はコロナの影響もあり WEB での実習を含

む。評価方法は、受け入れ先評価 40%、実習報告書による評価 60%である。

- ・ 想定される実績として、受け入れ可能な企業数は令和 3 年度／200 社、令和 4 年度／223 社であるので、企業数は約 250 社ある。平成 30 年度：143／160 (89.4%)、令和元年度：130／147 (88.4%) の実績から、参加見込み学生数は約 145 名 (約 90%) であり、また情報系実習内容を含む企業も相当数あるので、新学科を設置しても企業側の受け入れ態勢は十分にあると推測される。

【海外語学研修】

- ・ 全学科で特別選択科目として設置する (語学研修含む)。令和 2 年度実績なし、令和元年度 3 名の実績あり。評価方法は、報告書 50%、口頭発表 40%、その他 (準備) 10% である。
- ・ 想定される実績として、タイ、オーストラリア、フランス、シンガポール等 4 機関以上、海外研修参加人数数十名

9. 取得可能な資格

- ・ 取得可能資格はない (予定)。

10. 入学者選抜の概要

【新学科等のアドミSSION・ポリシー】

卒業認定方針 (ディプロマ・ポリシー) に定める人材を育成するため、次のような人を受け入れます。

- (1) 幅広い分野に関する基礎学力を有している人 (知識・技能)
- (2) 基礎学力を活用して論理的に考え、他者に伝える表現力を有している人 (思考力・判断力・表現力)
- (3) 主体的に学び、多様な考え方を理解して他者と協働できる人 (主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度)

【AI・デジタル情報工学科】

1. AI とデジタル情報技術について学びたい人
2. 実験を伴った高度な情報技術によって世の中を幸せにしたい人
3. グローバルな視野を持って、国内及び国際社会で活躍したい人
4. 情報に興味を持ち、未知のことにチャレンジする人
5. いつも夢を持ち、その実現まであきらめないで努力を続ける人

【半導体・電気情報通信工学科】

1. 半導体・エレクトロニクスや情報ネットワークについて学びたい人
2. 電子、情報、通信の総合技術の多様な分野で、世の中を幸せにしたい人
3. グローバルな視野を持って、国内及び国際社会で活躍したい人

4. プログラムやサイエンスに興味を持ち、未知のことにチャレンジする人
5. いつも夢を持ち、その実現まであきらめないで努力を続ける人

【ロボット・システムデザイン工学科】

1. ロボットなどを作り動かすために必要な知識や技術を学びたい人
2. 幅広い知識や技術を用いて世の中を幸せにするモノづくりをしたい人
3. グローバルな視野を持って、国内及び国際社会で活躍したい人
4. コンピュータを用いたモノづくりに興味を持ち、未知のことにチャレンジする人
5. いつも夢を持ち、その実現まであきらめないで努力を続ける人

【エネルギー・機械デザイン工学科】

1. 科学とエネルギー・環境の関わりを学びたい人
2. モノづくりによって世の中を幸せにしたい人
3. グローバルな視野を持って、国内及び国際社会で活躍したい人
4. 機械に興味を持ち、未知のことにチャレンジする人
5. いつも夢を持ち、その実現まであきらめないで努力を続ける人

【化学・生命工学科】

1. 新素材、バイオテクノロジー、環境などに関する知識と技術を学びたい人
2. 化学や生物の分野で、世の中を幸せにするモノづくりをしたい人
3. グローバルな視野を持って、国内及び国際社会で活躍したい人
4. 実験・観察・モノづくりに興味を持ち、未知のことにチャレンジする人
5. いつも夢を持ち、その実現まであきらめないで努力を続ける人

・ 選抜方法・選抜基準

入学者の選抜は、「推薦による選抜」、「学力検査による選抜」の2つの方法により実施する。

「推薦による選抜」は、面接及び個人調査書の総合判定により行う。

「学力検査による選抜」は、学力検査の成績、個人調査書及び入学意志確認書の総合判定により行う。さらに「学力検査による選抜」は、志望先により「一般学力選抜（一般学力）」（旭川高専のみを受験するもの）と「北海道内4高専の複数校志望受験制度による選抜（複数校）」（旭川高専、函館高専、苫小牧高専、釧路高専の北海道内4高専を併願するもの）及び帰国生を対象とする「帰国生特別選抜」に分けて行う。

・ 選抜体制

学科別の入学定員は、次のとおり。

なお、推薦による募集人員は、各学科とも入学定員の60%程度とする。

学 科	入 学 定 員	
AI・デジタル情報工学科	32 名	計 160 名
半導体・電気情報通信工学科	32 名	
ロボット・システムデザイン工学科	32 名	
エネルギー・機械デザイン工学科	32 名	
化学・生命工学科	32 名	

11. 教員組織の編成の考え方及び特色

- ・4学科から5学科へ専門学科が増えたことにより、単純に167単位分の授業が増加する。この授業増加分は、特任教員採用（基金見込み）と低学年への混成学級導入、所属学科以外の授業実施または合同授業での解消を予定している。
- ・専門学科の教員は、基本的に学科に所属するが、学科の垣根を取り払った学科間共通科目の配置により各専門学科間の交流を深めることを前提とする。
- ・既存学科の再編成を行い、完成年度（2030年）に5学科の教員を各8名、人文理数総合科の教員を22名とすることを目標としている。
- ・上記のうち、AI・デジタル情報工学科8名は常勤5名＋特任3名を予定しており、人文理数総合科22名は常勤21名＋特任1名としている（予定）。
- ・学校としての学生の総人数は160名と変わらないため、低学年への混成学級導入と所属学科以外の授業や合同授業実施により、基金による特任教員の増加に頼らないカリキュラム構成にする。
- ・基金による特任教員の増員中に、企業や自治体、他大学等と基幹教員が積極的に連携し、寄付講座や非常勤講師派遣など教員負担減の方策を講じる。

12. 施設、設備等の整備計画

- ・デジタル情報棟を新築する。デジタル情報棟では、1学年160人同時収容可能な教室の設置、2ー3クラス同時授業可能な教室を2部屋設置することを計画している。また、教員の研究室またはゼミ室を4室計画している。改組する全ての学科で新設するAI・デジタル情報工学科の教員や学生と交流や同時授業の機会を設け、新棟を積極的に活用する。加えて、施設整備費にて、現在の一部の棟（図書館棟）を、可動仕切り付き大教室に改築する申請を出している。これにより必要に応じて仕切って使える教室を増やす計画も進めている。さらに既存実験室等の再編または固定HR教室廃止等を施設委員会にて検討し、5学科体制で行う環境を整備する。

13. 管理運営

- ・経営総合企画室（校長）
- ・運営会議（校長）

- ・教員会議（校長）
- ・ハラスメント対策室（校長）
- ・ハラスメント相談室（ハラスメント相談室長）
- ・いじめ対策室（校長）
- ・入学者選抜委員会（校長）
- ・教務委員会（教務主事）
- ・学生委員会（学生主事）
- ・寮務委員会（寮務主事）
- ・点検評価改善委員会（総務主事）
- ・図書館（館長）
- ・情報処理センター（校長補佐（情報セキュリティ・教学 IR））
- ・テクノセンター（校長補佐（研究・地域連携））
- ・国際交流センター（校長補佐（国際））
- ・STEAM 教育センター（教務主事）
- ・学生総合支援センター（学生主事）
- ・学生相談室（室長）
- ・キャリア形成室（室長）
- ・修学支援室（教務主事）
- ・FD・SD 推進室（室長）
- ・入試広報室（室長）
- ・教育の質保証・DX 推進室（室長）
- ・教学 IR 室（校長補佐（情報セキュリティ・教学 IR））
- ・評価改善室（室長）
- ・HP・学校広報室（室長）
- ・ダイバーシティ・インクルージョン推進室（室長）

14. 自己点検・評価

実施体制

- ・点検評価改善委員会は、学内関係組織に自己点検・評価の実施を指示する。各学内関係組織は定期的に根拠資料を収集し、自己点検を実施し、点検評価改善委員会に点検結果を提出する。点検評価完全委員会は全体を取りまとめて評価し、校長に報告する。校長は、経営総合企画室に指示し、評価に基づいた改善計画を運営会議に提案する。運営会議は改善計画を審議し、各学内関係組織に改善を指示する。

この体制により PDCA のサイクルを廻している。自己点検・評価の結果については、3 年を超えない範囲ですべての評価項目を実施、本校 HP で公開し、外部評価を受けることとしている。また R7 年度には KIS 評価を受審する。

15. 情報の公表

- ・教育研究活動等の状況における情報発信手段は、刊行物として、学校要覧、学校案内、シラバス、募集要項、学生生活のしおり、学校だより、図書館報等があり、定期的に発行している。また、本校ウェブサイト以下の項目について掲載し外部に発信している。

- ①目的、卒業の認定に関する方針、教育課程の編成及び実施に関する方針、入学者の受入れに関する方針
- ②基本組織
- ③教員組織、教員の数、教員の業績
- ④入学者の数、収容定員、在学者数、卒業者数、修了者数、進学者数、就職者数、進学および就職等の状況
- ⑤授業科目、授業の方法、授業内容、年間の授業計画（シラバス）
- ⑥学修の成果に係る評価、卒業認定基準、修了認定基準
- ⑦校地、校舎等の施設及び設備その他学生の教育研究環境
- ⑧授業料、入学料その他徴収する費用
- ⑨学生の修学、進路選択、心身の健康等に係る支援
- ⑩学生が修得すべき知識及び能力に関する情報

16. 教育内容等の改善を図るための組織的な取組

- ・教員相互の授業参観 全教員を対象に相互授業参観（教員、教務委員会、年1回）
- ・新任教員FD PBLの必要性和事例、その見込み効果について（教員、教務委員会、年1回）
- ・FD講演会 DX人材育成の取り組みとICTを活用した教育について（教員、教務委員会、年1回）
- ・男女共同参画推進講演会 ワーク・ライフ・バランスで組織の活性化を（教職員、男女共同参画推進室、年1回）
- ・BYOD実施に向けた事例紹介（教員、教務委員会、年1回）
- ・質保証勉強会ワークショップ ハラスメントの防止及び対策に関する特別講演会（教員、教務委員会、年1回）
- ・FD懇談会 分野横断的能力をどのように測るか（教員、教務委員会、年1回）
- ・学級担任保護者面談対応ワークショップ（教員、教務委員会、年1回）
- ・トラブル対応ワークショップ（教員、教務委員会、年1回）
- ・授業改善FDワークショップ（教員、教務委員会、年1回）
- ・情報セキュリティ研修（教職員、情報処理センター、年1回）
- ・競争的資金獲得に向けた説明会（教員、研究協力、年1回）
- ・「学生による授業評価」アンケート（教員、教務委員会、年1回）

- ・授業コンサルティング（教員、教務委員会、年１回）

17. 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制

ア 教育課程内の取組

特別教育活動（LHR）による卒業生講話等

インターンシップ（選択）

実験、実習、ゼミ、PBL 科目、卒業研究などによる分野横断的能力育成

イ 教育課程外の取組

インターネットトラブル防止後援会

成人の責任と権利に関する講演会

進路に関する講演会

薬物乱用防止後援会

就職適性検査

面接対策講座

ウ 適切な体制整備

教務委員会、学生委員会、キャリア形成支援室が連携して行う。